



言葉と発達

いまだき子育てアドバイス
連載・193

安心子育てを 手伝えるために(1)

アイデンティティー確立途上の親御さん



言語聴覚士 中川信子

一人だけでは子育て負担に
耐えられない

先日、ある雑誌の取材で「今、子育て中の親御さんを見て、一番思うことは何ですか？」と聞かれました。

私の返事は、「お母さんだけに責任を負わせるのではなく、子どもたちを大人たちで育てる社会になってほしい、お父さんを早くお家に帰してほしい、ということ」でした。

子育てが難しい時代になってきた、と言われて始めてもう何年になるのでしよう。親御さん、特にお母さんたちの孤立と困難は、一年ごとに増しているように見えます。

このあとの連載で何回か、今どきの子育て中の親御さんたちをサポートし、安心して子育てしてもらうために何ができるのかを考えていこうと思います。

まず、最初に関心がある場合をお話しし

ます。



私の場合 「出口の見えないトンネル」

以前にもお話ししたことがあると思います。私は、結婚と同時に就職。言語聴覚士としてリハビリテーション病院にフルタイムで勤めていました。妊娠し、切迫流産を経験し、年休消費ではしのげそうもなく、通勤に耐えられずに退職しました。

退職は自分の体力的制約が大きかったのですが、自ら進んでやめたという面もあります。「3歳までは母の手で」という言い方を無条件に認めるつもりはありませんでしたが、ヒトの赤ちゃんや子どもに限って言えば、哺乳類である以上、幼児期に母を求めるのは当然のこと。十分に満たされ、成長すれば自然と自立していく……。障害のある子どもたちの姿を見て、乳幼児期の母子関係の安定は決定的に大切、と感

じていたからでもあります。

将来、思春期になったところに、「赤ちゃんのとき、そばにいてやっていらなかったのではないか」と後悔したくない、と思ったのです。

そのために、たとえいつたん仕事から離れても、非常勤で働けるように、と手に職をつける道を選びました。それを許してもらえ家庭状況と、経済的バックアップがあればこそそのぜいたくな言い分ですが。

それにしても「ワークライフバランス」と声高にいわれるわりに、子育て家庭への配慮が全くと言っていいほどない会社と社会の実情。「子育ては母の仕事」との強い社会通念。母にとっても子どもにとっても困難な日々です。

「母の手で育てよう」と決意していた、と言っても、実際に自分だけで育てたのはたった8カ月。あけても暮れても、おむつの世話、泣きわめく子ども、滞

を立て始めます。

ありがたいと感謝する気持ちが大半でしたが、ちよつぱり嫉妬に近い気持ち、自分を責める気持ちもない交ぜになった複雑な心境でした。

当時は、子どもと気長につきあえなくて、すぐにカッカする私が親として未熟だから、子育てがうまく行かないのだと自分を責めていました。

が、今の私は違います。おじいちゃん、おばあちゃんが孫との付き合いが上手なのは当然のこと。なぜなら、時間に追われていないし、困ったと思える行動も、振り返ればごく一時的なこととして過ぎ去ってゆくと知っているからです。

子育てを一通り終えた今だったら、あの時期の息子のあつちへちよろちよろ、こつちへウロウロの動きに十分気長につきあつてやれるだろうな、とも思います。

そんな自分の体験があるからこそ、

る家事、心を込めて作った離乳食も全然食べてくれない。仕事とはいえ夜遅くまで帰らない夫。毎日のように飲み会。なぜ?? 私だつて働いていたのに。働きたいのに。

自分で選んで退職して育児を選んだのに、出口の見えないトンネルのような日々。音を上げ、たまたま依頼された月に1回、2回の仕事を頼りに、外に出るようになりました。

「自分だけで」といつても最初から隣家に住む実母の助けをいつも受けての子育てでした。ちよつとしたときには預かってもらえ、病気のときには手代わりがあり、子育ての伝承を実地に教えてもらえる。そんな恵まれた環境でした。

にもかかわらず、あの時期の、出口の見えないトンネルに入ったような、社会と切り離されてしまったような孤独感。たとえようもないものでした。月に1回の、通園施設での「こと

子育てを一人だけかかえないで、経験者やプロの手をどんどん借りて、ラクをしながら、しのいで行きましよう、つらいのはいつとことです。よ、と伝えたいと強く思っているのかもしれない。理想の子育てができていたら、きつと、親御さんたちへのまなざしはもつと厳しいものだっただろうと思つています。



子育てだけの話ではない 「孤立を防ぐ」入り口としての母子保健の活動

自殺、虐待、孤独死、引きこもり……いずれも、社会とのつながりが切れた孤立が要因になっているのは、どなたもご存じのことです。

同様に、子育て家庭や、お母さんたちが孤立せずに、多くの人や制度をじょうずに利用できるようになることが、安心子育ての不可欠要因。

こんにちは赤ちゃん事業に始まる



子育て、一人だけでかかえないで

私の母は楽しみに息子の子育てに付き合ってくれていました。それに、子どもの扱いが上手でした。

私が寝かそうと抱っこしても全然寝ないのに、母が「あらあら、寝ないの？ 私が抱っこしてみましようね」と抱っこしてくれると、やがてスウスウ寝息

「あなたは一人じゃない」「困ったときには助けようとしている人がいるよ」というメッセージは、とても大切なことだと思います。

また、健診の場で保護者に対応して「はい、ご苦労さまでした!」とハンコを押して終わり、ではなく、「愛着を持って長く住んでくれる住民をふやす」「町をになう未来の住民(子ども)育て」「地域づくり」の視点を持って、母子と接することのできる人になりました。

そこで、お母さんたちの気持ちと近づかため、いくつかのヒントを。

マイナスの気持ちをオープンにしている センモンカだって一人のダメ親

朝、目がさめたときに「あーあ、夜まで子どもの世話か……と、うんざりするんです」というお母さんの声を何回も聞きました。

どういふふうに聞き出した?かという、私はまず、自分のことを話して水を向けるようにしています。

「朝、目がさめて、最初に、どんなこと、思いますか? 私なんか、息子がちょうどこのくらいの歳のころ、あーあ、また夜まで子どもに振り回される暮らしか……ってウンザリしていましたけど」

「ぎゃん泣きするときなんか、『消えろ!』って杖を振ると消えて、こっちがコーヒーでも飲んで新聞を読んでゆったりした気分になってから『出てきてもいいよ』と杖を振ると、泣き止んでご機嫌になった子どもが現れるんだといのにと、どんなに願ったことか」などなど。

ちょっとビククリしたようすの人や、わが意を得たりとばかりに話し始める人、いろいろいます。

センモンカと言われる側にいる私たちが、自分の正直な気持ちを、特にマ

をやっておくと、思春期がうんと楽になるはずですよ。

「マイナスの気持ちが生まれるのは当たり前のこと」

「気持ちは気持ちとして素直に認める。ただ、それを実行しないで、じょうずにコントロールすればいい」

「そのために、支援の選択肢を持ち、煮詰まらなことが大事」

「ごく小さなことでも聞いて、共感してくれる人を見つけるとガス抜きになり、長丁場の子育てに取り組むことができる」

「子育てには正しい知識も必要。ネットや育児書の知識もあながち間違っていないが、あまりうのみにしないこと。保健センター等での相談は、大きく間違っていない範囲でのアドバイスがもらえる」

と伝えたいし、そういう場を増やしたり、紹介したりしてあげることが大事なのだと思います。

イナスの気持ちを隠さずに言語化する、相手は一挙に近づいてきてくれる、ということ。

「えー、先生もそうだったんですか」と、ほっとしたようにおっしゃる人、「実は、そうなんです」と控えめに心情を吐露する人、いろいろ。

みんな一緒に、いつせいに、はずれではないという同調圧力が非常に強い日本。学校時代には集団への過剰適応を強いられ、就活で自信を失われ、職場ではコマの一つに徹するよう求められ、といった経験の連続で、「自分の気持ちを出す」ことを学ぶ機会を奪われてきた世代の人たちです。

おまけに家庭でも「みんなと一緒に」を強いられてきたとしたら、どこで自分らしさを表出できたのでしょうか? 特に、社会的にはマイナスとされる気持ちの表現を?

親になってからも、育児書に書いてあるとおりやらねばならぬ、標準範
対象が多すぎて、一人ずつにいていねいにかかわることが難しい場合もあるでしょう。せめて、健診や窓口を訪れる方たちに「よくいらっしやいました!」の気持ちをこめた笑顔で「こんにちは」と迎えること。それが、「この町では困ったときには親切に助けてくれる人がいるんだ」との思いを育て、町に愛着を持つ良き住民をふやすことにもつながるでしょう。

団内に入らなければならぬ、よい親でなければならぬ。ならぬならぬの連続では長続きできるはずがありません。

親としてのアイデンティティー 確立途上の人たちを 見守る、寄り添う

子育て中の親御さんたち、お母さんたちは、子どもを杖として、鏡として新たな自分育て、親として、母としてのアイデンティティー確立に苦闘している人たちなのだと思います。揺れたり知らなかつたりして当然。

努力に見合う成果が期待できる仕事とちがつて、子育ては、いつが終わりか分からず、これどうまく行くかどうか分からないままにがんばらねばならない感情の仕事。

自分の感情を正直に見つめ、表現することを通して、自分を客観的にとらえる練習が必要です。乳幼児期にそれ

